

令和4年5月31日

浜田市議会議長様

団体 子どもの健康と人権を守る会

住所 浜田市周布町口8-4

代表者 小竹和憲



児童・生徒のマスク着用に関する陳情について

願意

- ① マスク着用が前提の差別や偏見を助長させる表記の貼り紙撤廃
- ② 小学校・中学校・高等学校に通う児童・生徒へ一律のマスク着用の推奨・指導を中止
- ③ 児童・生徒がマスク着用可否を選択出来、その選択によって子どもの人権が侵害されない環境の保障
- ④ マスクを外してよい場面では教職員、保護者へのマスク着用を求めず、積極的に外すように通達・指導
- ⑤ 人権とマスクに関する小冊子「たいせつなあなたへ」を各家庭、教育機関への配布
- ⑥ 熱中症は死に至る危険があるものとして各家庭・教育機関への周知徹底
- ⑦ 手洗い可能な場での消毒用アルコール撤廃
- ⑧ 地域の実情に応じた独自対策の推進

理由

- ① 政府は、新型コロナ対策の基本的対処方針を変更し、マスクについて着用が必要ない場面等を示しました。しかし、この2年半の間、政府やメディアは感染者数増を連日報道し国民の不安を煽り続け、それを受けて県や市は「感染対策の徹底」を求め、100%に近い国民がお願いに従ってマスクを着用する生活となりました。元々、風邪の際にマスクをする習慣のあった日本でマスク着用は屋内外問わず一度も義務化となっておらず、エアロゾルに対して予防効果はないとされていますが、ほとんどの人は事実を知らないままです。町ではマスク着用が前提の「思いやりマスク」「マスクマナー」「大切な人を守るマスク」といった同調圧力を生み、差別や偏見を助長させるかのような表記



の貼り紙をし、マスクをしなない＝ルールを守れない、悪とする風刺も生まれました。見た目には分からない健康上の理由からマスク着けられない人もいます。思いやりとは、マスクをする人もしない人もお互いの気持ちを尊重するもので、一方の行為だけが善意であるかのように促すものではありません。厚労省の基本的な感染対策はマスクマナーではなく咳エチケットです。

- ② 新型コロナウイルスも3年目に突入し、学術的見識も広まり未知のウイルスではなく対応可能なウイルスとなりつつあっても、行政の対応は依然として変わる事も無く、何をするにも新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ事が優先だと言われ続けています。結果として熱中症リスクを考えて適宜マスクを着脱するようと言われても、1人で散歩をしている高齢者は相変わらずマスクを着用し、どんなに暑い日の屋外でもマスクをして子どもと遊ぶ親子の姿がありません。マスク生活の習慣化により、熱中症で死に至るリスクよりも、人目を気にして大人でさえ自分の意志でマスクを外せなくなっているのです。この国で流行っているのはコロナよりもマスクだと思います。まずは公共の場において差別や偏見を招きかねない表現の中止を求めます。マスクが必要な人、マスクを着ける事が出来ない人、どちらも浜田市にとって大切な人です。

そうした中、子どもを取り巻く環境は決して子どもの成長に好ましい傾向にあるとは言い難く、問題はもっと深刻です。マスク着用によるリスクが取り上げられる事は無く、大人を守る為に子どもの犠牲は仕方ないとされ、町の宝、未来の希望である子どもの心身への悪影響を真摯に受け止める大人が減ってしまいました。

友達同士がコミュニケーションを取る上で表情が見えず、怒っている様感じてトラブルになる、マスクによる肌荒れから素顔を見られるのが恥ずかしい、隠したい気持ちからマスク依存へ、マスクを外すと感染するという心理的状況が長引いた事により精神面での問題、食事中も一口度にマスクを着脱している児童も珍しくありません。顔の半分以上が覆われている為に中高生においては入学からの3年間、同級生や教職員の素顔を知らないまま卒業を迎えてしまいます。社会へ出れば必然的に理不尽な環境へ身を置く事もあるでしょう。今のうちに大人が、多様な価値観や物の見せ方をしておく必要があります。友達同士がそれぞれの気持ちに寄り添い、素顔で笑い合えるよう、市内小学校・中学校・高等学校に通う児童・生徒へ一律のマスク着用の推奨・指導中止を求めます。

- ③ 子どもの身を心配する保護者が児童・生徒へマスクを外すように促しても、小学校ではクラスの目当てが「鼻までマスクをしましょう」と決められ、同調圧力からの差別や偏見が生まれています。校長や教職員が校門前に構え、登下校時に鼻までマスクをしていないと厳しく叱られる事が日常化し、子ども達はマスクをしている生活に慣れ、マスク

をしているほうが先生に褒められ、認められる嬉しさすら感じてしまっているのです。学校運営ガイドラインの衛生管理マニュアルに追加されているマスク着用の指導については法律で決められているものではなく、教育委員会や学校が強制する事は出来ません。保護者裁量で保護者の判断に委ねられるものです。

ましてや、何が正解か分からない児童・生徒の自己選択を奪い、実質強制的なルールを強いる事は、大人が安心する為に大人の指示に従わざるを得ない子どもの人侵害に当たると考えます。子ども達にも日本国憲法第 11 条「基本的人権の尊重」、第 12 条「自由と権利の保障」、第 13 条「幸福追求権」、第 25 条「全ての国民は健康的で文化的な最低限度の生活を営む権利」があります。マスクの着用を強制するのではなく、その可否は子どもに選択させるよう求めます。

- ④ また、外しても良い場面が展開されても強制の慣習から子どもは戸惑い、自らマスクを外せません。口頭で指導するだけでなく、外してよい場面では教職員や保護者が率先してマスクを外してみせ子どもへ促す必要があります。
- ⑤ 感染を予防する対策として不織布マスクの着用が推奨されていますが、着用効果ばかりが報じられ着用によるリスクがほとんど認知されていません。大人より酸素を多く必要とする子どもはマスク着用から数分で低酸素状態を作り出し、今の季節は熱中症で生命に繋がる危険があります。マスク生活となってから鼻血を出す子どもも増え、長時間の着用は免疫力の低下や通常生活の中で獲得するはずだった免疫も得られなくなり、表情が見えないことによるコミュニケーションや知育の発達遅れなど心身ともに悪影響を与えることは、世界中のたくさんの医師・専門家が提言しています。他にも口呼吸や心臓への負担、窒息、眠気、怠さ、骨格のゆがみ、顔色等の体調変異時に発見が遅れる等の注意喚起もされていますが、周知には至りません。浜田市内ではマスクをしないなら遊ばせない、マスクをしないならうちには来るなど友達の親から差別を受けている児童もいます。まずは家庭、教育機関へのマスク着用によるリスクの周知・理解が必要であり、各家庭で判断を促す一助として市民団体リトルレボリューションが発行している小冊子「たいせつなあなたへ」の配布を求めます。(添付致します)
- ⑥ 熱中症は必ずしも炎天下の中、運動時に起こるとは限らず、屋内やエアコンの効いた部屋、水分補給をしているつもりでも起こり、死に至る可能性のあるもので簡単に考えられるものであってはなりません。身長の高い子どもは地面に近いので、大人よりも 3℃以上の熱を受けることがあります。子どもは体温調節が未熟な上に、適切に判断して水分摂取したり、早めに休憩したりが出来ません。そこへマスクをしていると身長の高い子どもは地面に近いので、大人よりも 3℃以上の熱を受けることがあります。子どもは体温調節が未熟な上に、適切に判断して水分摂取したり、早めに休憩したりが出来ませ

ん。マスクによって狭い視界は更に遮られ、注意散漫にもなります。呼気によりマスクの表面は濡れていますが体内では脱水状態となっている為に、自己治癒力は働かず自覚症状が現れる前に突然倒れてしまいます。子どもを守る為の予防対策として期待される効果と引き換えに、子どもの心身へ悪影響があるというのは本末転倒です。文科省は推奨と言いつつ学校から強制された場合、子どもの健康は誰が保証してくれるのでしょうか。コロナは罹患しても治りますが、万が一で失った命は戻りません。現在も小・中学校からの対応変更のお知らせはなく、登下校、運動、部活時に児童・生徒はマスクを外せていません。犠牲を出してしまう前に熱中症は命の危険があるという事を家庭、教育機関への周知徹底を強く求めます。

- ⑦ 県内では消毒用アルコールを隠れて舐めて意識不明になった年長児がありますが、興味本位で舐めないにしても噴霧を吸入する事によっては教育の現場でも起こりうる問題であると考えます。消毒用アルコールは手洗いを出来ない場合の対策であるはずが、感染対策の徹底という指示の元に過剰な対策が行われ、子どもを守るはずの対策が子どもの生命を脅かす物になっています。店内に設置してあるフットレバー式の消毒を遊び半分で使用し、目や口に噴射する光景もよく見られます。

また、除菌し過ぎる環境で通常生活の中で獲得すべき免疫を得られず、長期化しているマスク生活で免疫力が低下したところへ小児における感染症に罹患すると通常より重症化し易い事も報告されています。

- ⑧ 浜田市では65歳以上の94%が重症化を防ぐと言われているワクチン接種を終えています。重症化をした子どももいません。陽性者数も市民比率の小数点以下です。

命を脅かす恐れのある感染症はコロナだけではなく、過剰な対策によって子どもの成長発達や健康への弊害が顕著に生じている今、地域の実情に応じた対策が取られても良いのではないのでしょうか。

今年度から子どもの医療助成も拡大され子育て世帯の安心は増えましたが、大切なのは病院へ掛かることなく、体調を崩してもすぐに回復できるような心身ともに健康な子どもを社会全体で育てることが前提であると考えます。必要な場面に応じての感染予防、対策は大切だと思いますが、大人の都合で子ども達の健やかな成長を理不尽に奪うのは、本来の目的とは間違った方向に進んでいると感じます。海外では基本的な感染対策を取り止め、ノーマスクの動きが広がっています。日本は、島根は、浜田市はいつまで世界と逆行する政策を続け取り残されていくのでしょうか。未来に希望が持てない子どもは自身の存在意義、居場所を求めて都会へ出て行きます。人口流出は益々悪化するでしょう。予防線を張って何もかも取り上げてしまうのではなく、何か問題が起きたとしても子どもは何も心配しなくていいと安心を与えられるような大人が増え、いずれ子ども達が大人になった時は地元で恩返しをしたいと思えるような寛容な町であります。

ように。私達が育てているのは子どもではなく、未来そのものです。最初に声を上げるのはとても勇気のいる事ですが、子どもの犠牲の上に成り立つ社会ではなく、大人が子どもを守る誇れる町となるよう心から望んでおります。